
ぶらり世界旅 ライダー世界編

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらり世界旅 ライダー世界編

【Nコード】

N2498T

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

これは一人の少年の自由奔放なぶらり旅。

今日も今日とて少年は色んな世界を訪れます。

はたして少年の旅は世界に何をもたらすのか？

自由奔放編 人物紹介改（前書き）

主人公が男の娘になりました。

自由奔放編 人物紹介改

登場人物紹介

・主人公

麻生 悠斗 17歳 髪は銀色。肩までの長さ。

目は青い。見た目は11eyesの栞を少し？成長した感じ。男の娘

性格は自由奔放。一つのところに縛り付けられるのを嫌う。基本的に優しく困っている人を見ると、つい助けてしまう。

だが何もかも助けるのはよくないと思い本人にできるだけのことはさせてどうしようもなくなった時に助ける。

変身するライダー

・キバの世界

ダークキバ

キバの世界登場人物

紅 由利亜（くれない ゆりあ）

見た目は緋弾のアリアに出てくる星伽白雪。

性格は天真爛漫。

色んなことに興味を示し自ら物事に積極的に関わって行く。原作の仮面ライダーキバの紅音也に緋弾のアリアの白雪をたして2で割ったかんじ。音也の様に愛をささやいたりもするが悠斗にだけである。ファンガイアの女王（キング代行）であり仮面ライダーキバである。

自由奔放編 人物紹介改（後書き）

まあ、よろしくお願いします。

旅紹介（前書き）

まあ始まりです。

駄文ですがどうぞお手柔らかにお願いします。

旅紹介

悠斗Side

いきなりだがみなさん旅人はご存知だろうか。

旅人と言っても別世界を旅する人達の事だけだね。

えっ、そんな人達普通いないって。

そうかなあ？知り合いにもけっこういるんだよ。

例えば青い銃を持ってカードを使って戦う通りすがりの怪盗さんとか。

お姫様の羽を集める四人組と白くてもちつとしたのとか。

けっこういるんだけどね。

まあそんな俺も旅人何だけどね。

どうやって旅をしているかってそれは簡単。

この魔法のレトロテレビのおかげで。

って見えないないか。

ダイヤル式の白黒テレビだよ。（「。□。」）

がんばって想像して。

ちなみにこの魔テレビで家ごと別世界に行ける。

ちなみに家は仮面ライダーキバの紅渡の家と全て同じ。

「ではさっそく別世界に言ってみますか。」

「ダイヤルを回してっと。」

さてとどんな世界にいくのかな？

旅紹介（後書き）

どうでしたか？

まあ駄文ですが。

キバの世界（前書き）

第一の世界です。

相変わらず駄文で短いですが、どうぞお手柔らかにお願いします。

キバの世界

「さてと次の世界に到着か。」

この世界は何の世界かなあ。

窓から外を見ると少し離れたところに町が見えた。

そして巨大なビルいやキャスルドランが。

「というところはキバの世界か。」

キバの世界ということはあいつならけっこう詳しいだろうな。

「おい。二世。キバット・バット二世出て来てくれ。」

といっしょに旅をしている相棒キバット・バット二世を呼ぶ。

何故キバット・バット二世がいっしょに旅しているかって？それまたいずれ。

「呼んだか？悠斗。」

おっ、来てくれたみたいだ。

「ああ。どうやらここはキバの世界みたいだから。何かしってる？」

二世は窓の外を見て暫く考え込むと。

「どうやらここは俺の世界のようだ。」

二世の故郷か。

二世の家族とかいるのか気になる。

まあいいか。

「この世界について教えてくれるか？」

「ああ。構わない。この世界は人間とファンガイアが共存している世界だ。」

共存？

「人間とファンガイアの共存？そんなこと可能なのか？確かファンガイアは人間のライフエナジーっていうの吸うじゃなかったんだっけ？」

「確かにそうだがこの世界は違う。」

「違っつてなにが？」

「この世界には掟がある。ファンガイアは人間を襲わない。ライフエナジーを吸わない。掟を破ったファンガイアには極刑がくだる。今よりも昔のキングとその仲間達が様々な闘いを乗り越えて作りあげた世界だ。」

二世は何か懐かしいものを思い出すかのように語った。

「俺は全てが終わった後、この世界から出た。」

「この世界から出てどれくらい？」

この質問の返答によって色々考え直さなくてはいけないか。
「さあな。かなりの時間がたったのは確かだが。」

はあ、やっぱりそう上手くはいかないか。

さてと俺は決心して扉の前に立つ。

「行くのか？」

二世が聞いてくる。

「ああ。やはり旅は何も分からないほうが楽しいだろ。」

旅を楽しむとしますか。

「お前らしいな。」

二世がニヤニヤしながら聞いてくる。

なんかうざい。

気にせずいこうか。そして扉を開く。

二世に声を掛ける。

「さあ、行こうか二世!!」

そして扉を開いて……

直ぐに閉めた。

二世が不思議そうに聞いてくる。

「何をやっている。」

いや、だってさ。

そして俺はもう一度扉を開ける。

そこには全身黒一色の女の子と二世によく似た金色のコウモリがいた。

続く？

キバの世界（後書き）

少女は一体？

まあ続くんです。

駄文でしたね。

もしよろしければまた見てください。

紅きキバ 紅 由利亜（前書き）

ようやくキバが登場します。

最後の方にちよつとだけ。

紅きキバ 紅 由利亜

はてさて一体どうしてこうなったのやら。目の前では口一杯オムライスを詰め込んだ少女がいる。

「ふおのふおみふあいふふごふふおいしいふお。（このオムライス凄くおいしいよ。）」

何を言ってるんだ。

「食べるか話すかどつかにしろよ由利亜。このオムライスすげえ美味いからわかるけどな。」

何か二世によく似たコウモリが喋っている。

二世はまた気付いたらいなくなっていた。逃げたな二世。

とまあこの状況に至った原因を説明すると家の前で倒れていた少女を助けて開放した。

そして少女は目をさました。

そしてだい一声は

「お腹すいた。」

まあそんな感じでこの少女とコウモリさんに俺特性オムライスをご馳走しているところ。

「うぐん。ぷはあ。美味しかった。」

どうやら食べ終わったようだ。

「ありがとう！！すっごく美味しかったよ。このオムライス。」

満面の笑顔で少女はれいを言ってくれる。こういうのはやっぱり嬉しいな。

「私は紅由利亜。でこっちにいるのはキバット。」

少女こと由利亜はテーブルの上でオムライスを食べ終わったコウモリを指差すとそういった。

「俺様は由緒正しきキバット族のキバット・バット三世だ。よろしくな。あとオムライス美味かったぜありがとな。」

名乗られたら名乗り返さねば。

「俺は麻生悠斗。後、食事の事は気にするな。困った時はお互い様だ。まあよろしく頼む。」

「悠斗っていうんだ。よろしくね。」

「よろしく頼むぜ悠斗。」

由利亜と三世が返事をしてくる。

「ねえ。突然なんだけど悠斗はファンガイアってどう思う？」

「別に何とも思っていないが。」

そう返すと由利亜が悲しい顔をして

「それってどうでもいいってこと？」

と返してくる。

「そういう意味じゃない。ファンガイアだろうが人間だろうが結局そんなものに意味はない。個人個人がどうあるかが重要なんだ。」

由利亜は驚いた様子だ。口をあんぐりとあけている。
だが途端に笑顔になる。

「そつか。個人がどうあるかが重要かぁー。そんなこと言われたの悠斗が初めてだよ。さすが美味しいオムライスを作れるだけはあるよね。」

いやそれはないから。

つていうかそろそろ外にいつてみるか。

「由利亜、三世悪いんだがちょっと俺は外に出てくるね。」
由利亜が

「何か用事でもあった？」

「俺はここにきたばかりだからちよつと町を見てくるよ。」

「えっ、そうなのなら私がここを案内するよ。そうと決まればさっそく行こうか！」

そついうと俺の腕を掴むとそのまま町の外へと連れ出した。

「ってなぜ腕を組む。抱きつくな！！」

外に出たら右腕に抱きついてきた。

「悠斗ったら純情なんだね。腕組んだぐらいで顔真っ赤だよ。」

なんかニヤニヤしながら言われた。

「だいたい好きでもない奴にそういう事するな。」

手を引き離す。

すると由利亜は不機嫌そうに頬を膨らませる。

「私は悠斗のこと好きだよ。一目惚れっていうやつだねえこれは。」

「はい！？いきなりなにいつてんの。」

戸惑う悠斗。

告白なんてされた経験がない。鈍くて気付いていないときもあるけど。

「さっきの言葉で私のハートは撃ち抜かれたよ。ふつつかものです。がどうぞよろしくお願いします。では誓いのチューをしよう！」

と言いながら口をタコにしてちかづいてくる。

これには焦る悠斗。

「調子にのるなー！」

両手で頬をはさんで接近を防ぐ。

「てふえない。てふえない。てゅーしよ。んてゅー。（照れない。照れない。チューしよ。んちゅー。）」「

（やばい。由利亜なんかすごい力強い。このままでは。）

などと悠斗が貞操の危機をかんじていると。

「キヤー！！」

どこからともなく悲鳴が聞こえてきた。

悲鳴がした方を見て見るとアゲハファンガイア（アゲハ蝶を模したファンガイア）が人間を襲っていた。

「ファンガイアは人間を襲わない掟があるじゃあないのか？」

「中には掟を破って人間を襲うファンガイアもいるんだよ。」

悠斗の問いに答え由利亜はアゲハファンガイアに向かって行く。

「由利亜何やってんだ。危ないぞ！？」

「大丈夫。まあ任せてこっちは慣れてるから。」

そういつてアゲハファンガイアの前に立つ由利亜。

「あいついったい何するきだ。」

無謀としか見れない由利亜の行動を見て困惑する悠斗。

「その貴方。人間を襲うなっていう掟を知っているわよね。」

由利亜がアゲハファンガイアを問いただす。

「なんだ貴様は？邪魔するなら容赦はせんぞ！！」

「って聞く耳なしか。こうなったらきてキバット!!」

由利亜の呼び掛けに応えてキバット・バット三世が駆けつける。

「由利亜、たくおいていくなよな。」

「ごめん。ごめん。力を貸してキバット!!」

「ああ。行くぜ由利亜!!」

「がぶっ!!」

キバット・バット三世が由利亜の手に噛みつき由利亜に魔力皇を流して行く。

そして由利亜の腰にベルトが巻き付く。 由利亜がキバットを右手に持ち変え前に突きだす。そして

「変身!!」

その言葉とともにキバットをベルトにとまらせる。

由利亜の身体を魔力皇が包んで行く。

そしてその身体を鎧が覆う。

紅きキバの鎧。

そしてそこには吸血鬼をモチーフにしたこの世界の仮面ライダーキバが降臨した。

「さあキバツて行くぜ!！」

キバツト・バツト三世が叫び。

「さあ、行くよ!！」

由利亜が吠える。

悠斗は由利亜が変身した姿を見て今までとはうって変わって冷静に、

「あれがこの世界の仮面ライダー。キバ。由利亜がそうだったのか。

」

そうつぶやいた。

紅きキバ 紅 由利亜（後書き）

すいません。

また短いです。

次はバトルです。

悠斗はまだ変身せず。

路地裏とマイエンジェル（前書き）

闘いを書くのは難しい。すごく短くなってしまいました。

今回も 駄文 です。

路地裏とマイエンジェル

キバとアゲハファンガイアがぶつかる。

キバ「はっ。ふっ。てりゃ!!」

キバの三連続パンチがアゲハファンガイアの胸を殴り付ける。

たまらずアゲハファンガイアは怯む。

だがアゲハファンガイアも口から衝撃波を出し反撃する。

キバ「うわっと危ない危ない。」

間一髪避けるキバ。

キバ「今度はこっちの番!!行くよ。てりゃ!!」

悠斗 side

悠斗「なかなかの戦闘力。だけど動きが少し危なっかしいな。」

キバ（由利亜）の闘いを見ながら悠斗は感想を述べる。

キバット・バット二世「ああ。だが経験を積みば伸びるだろうな。」

といつの間にか現れたキバット・バット二世が悠斗の言葉に意見する。

悠斗「いつの間に来たの二世？」

二世「さっきからいた。そんなことよりそろそろ決まるぞ。」

その言葉でキバとアゲハファンガイアの方に目を向ける悠斗。そこにはアゲハファンガイアを追い詰め腰から赤いフェッスルを引き抜くキバがいた。

キバ（由利亚）side

キバ（由利亚）「さてと止めといきますか。」

キバは自らの腰からフェッスルを引き抜くとベルトにとまっているキバット・バット三世にくわえさせる。

三世「ウェイクアップ!!」

三世がフェッスルを吹く。すると今まで昼間だったのが夜となった。

キバが右足を上空に向かって上げると、右足のカタナ封印を解かれる。

そのまま上空にキバが上がって行く。

そして急降下して行く。

カテナの封印が解かれた右足がアゲハファンガイアを捉え襲う。

キバ「はああ！てりや！！」

キバのダークネスムーンブレイクがアゲハファンガイア襲う。

あまりの威力にそのままダークネスムーンブレイクの勢いで近くに
あった建物の壁にアゲハファンガイアをぶつける。

その壁に衝撃でキバの紋章が刻まれる。

アゲハファンガイアがガラス細工の様に砕け散る。

悠斗 side

悠斗「決まったか。」

二世「そのようだな。」

悠斗と二世がつぶやいた。

その際悠斗が目端にカプトムシの様なファンガイアが写った。

悠斗「今のは。」

悠斗はファンガイアらしきものがいた路地裏を見て見るが誰もいなかった。

二世「どうかしたのか？」

二世が聞いてくる。

悠斗「ちよっとね。」

そういつて悠斗は路地裏に向かって走って行く。

二世「おいっ！！たく仕方がない。」

そういつて二世は悠斗を追いかけて路地裏に入る。

由利亜Side

私は変身を解くと後ろにいるはずの悠斗に声を掛ける。

「見てた悠斗。私の変身シーン。残念ながら裸にはならないけど。がんばったからご褒美にチューして。っていうかいなー!？」

悠斗がわたしのダーリンがああああああああああー
—————!

三世「おい、由利亜落ち着けよ。」

三世が呆れながら言うてくる。

「だってー。悠斗がああ。マイエンジェルがあー!!」

自分でもここまで好きになってしまつとは思わなかったけど。でもこれは愛!! 愛!! 愛!! 愛!! 悠斗はどこおー。

「あの〜。」

とさつき助けた人が話しかけてくる。

由利亜「何!?!」

助けた人「茶色の髪の男の子ならあそこの路地裏にいきましたが。」

由利亜「えっ、そうなの!?! ようし待っててねえマイエンジェル!!」

そういつて由利亜は路地裏に向かって凄いスピードでスキップしていった。

三世「おーい。待てよ由利亜。」

三世も由利亜に続いて路地裏に向かっていった。

悠斗Side

なんだろうなんか寒気が。

まあ気のせいだろう。

俺は路地裏に入った訳なんだが結局ファンガイアはいなかった。

悠斗「結局見間違いだったか。」

二世「そうか。まあ何もなくて良かったのではないか。」

悠斗「まあそうなんだけどね。拍子抜けというか何というか。」

とそんなことをしていると。

???「お兄さんこんなところでどうしたの?」

後ろから声がかかってきた。

路地裏とマイエンジェル（後書き）

ひどかったですね。（「。□。」）

すいません。

次回なんかでます。

闇のキバ（前書き）

悠斗変身します。変身するだけですが、駄文です。

闇のキバ

悠斗Side

???「こんなところでどうしたのお兄さん?」

そんな声が聞こえ振り返ると。

???「こんなところで探し物?」

銀色の髪の子が話しかけてきた。

???「私の名前はイリアお兄さんの名前は?」

悠斗「す、すまない。俺は悠斗。麻生悠斗だ。こっちのコウモリみたいなのは、キバット・バット二世。俺の相棒だ。」

俺はその少女イリアにみとれながら言った。」

イリアはFate/stay nightのイリヤスフィールと見た目は同じ。

イリア「へえー。悠斗。ユウト。ユート。うん。ユートこれが呼びやすいね。よろしくね。ユート。ついでにキバット。」

悠斗「ああ。それで構わない。」二世「俺はついでか。」

悠斗「ドンマイ二世。」

俺は哀れみの目で二世を見る。

二世「なんだその目は!？」

悠斗「ところでイリアこちら辺でカブトムシみたいなファンガイア見なかった？」

二世「おいつ。無視するな!!」

イリアは俺達のやりとりを見ながらクスクスと笑うと、

イリア「しらなーい。ねえねえ。そんなことより悠斗はファンガイアをどう思う?」

なんか前にもきいたなこれ。

悠斗「俺はファンガイアだからどうしようとかそんなことは思わないし、考えない。個人が何をどうしようとするか、何を考えて行動しているのかそれを見て判断する。」

するとイリアは可笑しそうに俺を見ながら

イリア「変わっているのね。そんな考えの人初めてみたわ。」

二世「こいつは種族にとらわれない。誰に対してもその人物個人として見ている。まあめったにいない変な奴だ。」

二世が俺のことを褒めてくれて、ゝゝいるんだよね？

イリア「ふうーん。でもねファンガイアの本能は人のライフエナジ
ーを吸いたい奪いたい。それだけなんだよ。ただそれだけ。」

イリアは感慨深げに路地裏の空を見上げる。

悠斗「それは、違うんじゃない？」

イリア「違わないよ。今の掟はファンガイアの本能を無理矢理押さ
え付けてるだけ。悠斗貴方がどう思うかは貴方の自由でもね、私が
どう思うかそれも私の自由なんだよ。それだけは覚えておいて。じ
ゃあね。」

そう言うとイリア路地の奥に消えていった。追いかけるつもりはな
かった。イリアの自由という言葉がなぜか引っかかっていた。

悠斗「なんだかなあ。」

二世「あまり気にするな。それにあの女の言葉にも一理ある。」

悠斗「そうなんだけど。なんかあの娘無理している様な気がしてな。」

イリアの眼は助けを求めている様な、何というか、

二世「深く考えすぎではないのか。またお前の悪い癖だぞ。誰でもかたでも助けようとするな。」

二世のいう通りかもまたあったら今度はオムライスでもご馳走するかな。

悠斗「じゃあ、一旦家に帰ろうか。」

二世「そうだな。小腹が空いた。」

悠斗「じゃあ、何か作ろうか。」

そういつて俺達は路地裏を出ようと元来た道を引き返そうとしたら突如銀色のオーロラに飲み込まれた。

ここは森か？一面緑だらけか。

悠斗「さっきのオーロラ海東さんが使うのに似てるな。」

二世「ならこれはあの怪盗の仕業か？」

悠斗「それはどうだろう。海東さんがこんなこととして得するとは思わないし。」

二世「ならこれは誰の仕業だ？」

悠斗「さすがに俺にもそこまでは。つつ！！殺気！？」

突如として殺気を感じた方を見て見ると 青く銀色に輝くの仮面ライダータイガがいた。

悠斗「あれは仮面ライダータイガか。なぜあれがここに？」

二世「そんなこと言っている場合ではないくるぞ！！」

その声とともにタイガはその手に持つデストバイザーを振り下ろしてきた。

俺は咄嗟にその攻撃をバックステップで避け、距離を取る。

悠斗「二世力を貸してくれ。」

二世「ああ。構わん。お前は俺が守る。」

そう言うのと二世は俺の元にくる。俺は二世を左手で二世を持ち自らの右手を噛ませる。二世によって魔皇力が俺の身体に行き渡る。腰にベルトが巻かれる。そのまま二世を左手で手前に突きだし叫ぶ

「変身！！」

二世をベルトに止まらせる。

俺の身体が闇の鎧、黄金のキバの元になった闇の鎧に包まれる。そして紅と漆黒の闇のキバが降臨する。

仮面ライダーダークキバその力は由利亜の持つ紅きキバ（まだ由利亜は黄金のキバにはなれないので紅きキバとここでは分かりやすくそう言います。）とは圧倒的に凌駕する。

悠斗「俺の旅を邪魔をするなら倒すのみ。」

二世「ありがたく思え絶滅タイムだ!!」

俺と二世が宣言する。そしてタイガに向かって走り出す。

??? Side

ダークキバとタイガが今まさにぶつかり合う時遠くからその光景を見物している何者かがいた。

???「さて貴方の力を見せてちょうだい悠斗。」

???2「大丈夫かなあ悠斗さん?」

???「何も心配することはないわ。彼の力貴女も知っているでしょう?」

???2「そうだけどやっぱり悠斗さんが傷つくところは見たくないよ。」

???「それこそありえないわ。私が出しておいてなんだけど。あの程度の敵に苦戦するほど悠斗は弱くはないわ。」

???2「それもそうだね。そんなことよりやっぱり悠斗さんは素敵だなあ。」

???「貴方はやっぱり神経図太いわねえ。まあ、いいわ今は彼の力を見極めましょう。」

そういつてその二人は悠斗の闘いを見物する。

だが少し妙だった何故なら話をしていたものは一人しかいなかった。

そのころとある少女と一匹のコウモリ

由利亜「ゆうーとー！！私の天使ー。どこー。」

三世「はあ、これはなんか嫌になってくるぜ。」

ご苦労様二世。

闇のキバ（後書き）

なんか色々出てきましたね。これ伏線回収できるかなあ？

考えと選択（前書き）

なんかだらだらしていますが何とか書きました。後キバの世界は2、3話で終わります。

考えと選択

俺はタイガが振り下ろしてきたデストバイザーを左手の甲で防ぎつつタイガに言葉を向ける。

悠斗「お前は何処からきた。何故俺と闘う？」

タイガ「僕は英雄になる。」

悠斗「英雄？」

タイガ「そう。君を倒して僕は英雄になる。」

悠斗「意味がわからないな。」

タイガ「そうかい。なら君も英雄には相応しくない。」

そう言いつつタイガはデストバイザーにカードを挿入する。

《ストライクベント》

その音声とともにタイガの両手にデストクローが装着される。

タイガのデストクローの攻撃をバックステップで避ける。

タイガ「その程度で避けたつもりかい？」

《アドベント》

タイガが新たにカードを挿入する。

悠斗「なにっ!？」

突如としてタイガの契約しているミラーモンスター、デストワイルダーがダークキバに突っ込んでくる。

悠斗「くっ!？」

咄嗟に勢いを殺すためその場を飛び退こうとするが勢いを殺しきれずにダメージを受けて後ろに跳ばされる。

《フリーズベント》

直ぐに態勢を立て直すがタイガのフリーズベントにより足を凍らせられ動けなくなる。

今まで闘いを黙って見ていた口を開く。

二世「いつまで遊んでいるつもりだ悠斗。」

悠斗「そうだな。そろそろ決めるとしますか。」

と二世に言葉を返すと俺は腰のベルトについているフェッスルを引き抜き二世にくわえさせる。

二世「ウェイクアップ1。」

それと同時に二世がフェッスルを吹く。

タイガ「今さら何をしようと無駄だよ。」

《ファイナルベント》

タイガのデストワイルダーが現れる。俺を捕まえようとする。本来ならフリーズベントのせいになすすべなくファイナルベントの餌食

になってしまっただが今は魔皇力の開放により足の凍結を打ち消す。そして昼間だったのが夜、紅きキバのときとは違い紅い夜へと変わる。同時にダークキバが空中に飛び上がる。そしてウェイクアップ1によって繰り出されるダークネスヘルクラッシュをタイガたたきもうとする。その威力の余波に周りの木々までもがなぎ倒される。

これで決まる。そう俺は思いダークネスヘルクラッシュをタイガに決めようとする。

だがその前に俺は銀色のオーロラに包まれた。

???? side

???? 2 「キヤー！！凄いよ悠斗さん。かつこ良かったよ」

???? 1 「はいはい。しかしこの程度では彼の力は図れなかったわね。」

???? 2 「えっ、そうだった？」

???? 1 「彼が本気なら最初の10秒で決まっていたわ。」

???? 2 「にしても悠斗さんかつこよかったなあ。」

???? 1 「貴女人の話を聞きなさい！！まあいいわ。今回は挨拶程度。次の世界でまた会いましょう私のいえ、私達の愛しい悠斗。」

そっいつて少女は銀色のオーロラに包まれた。

悠斗 side

オーロラを抜けるとそこは先ほどの路地裏だった。

悠斗「戻ったのか。しかしあのオーロラはいつたい誰が？」

二世「おい。悠斗いつまでこのままでいるつもりだ早く変身を解け。

」

悠斗「そういえばまだ解いていなかったか。」

そう言つて俺は変身を解く。だが周りをよくみてから変身を解くべきだったと後悔することになる。

いたんだよすぐ近くに紅由利亜が。

由利亜「キターー（＾Ｏ＾）！！」

悠斗「な、なんだ！？」

二世「騒がしいなこの娘は。」

変身解除するところみられたのか。めんどくさい。

三世「おい。悠斗さっきのつてもしかして。」

三世もさすがに疑問に思ったのかきいてくる。

悠斗「まあ、仕方ないか。さっきのは。」

由利亜「ペアルックだね。」

悠斗「そうそうパールックって違うわ!!」

こいつは何を言っている。

由利亚「悠斗でもねさっきのはちょっと違うよね。」

なんかふざけた事言っていたが急に真面目な顔で話してきた。

由利亚「悠斗、私思ったんだ。色が違うって。」

(・・ω・・)

何を言っているこいつは。なんだそのドヤ顔は。二世と三世も呆れている。

由利亚「まずね私のは紅いけど黒くはないよ。それに目は緑じゃなくて黄色だよ。緑はバツシャーの時だけ。」

悠斗「ああ。そうか。」

なんかもうやだ。この娘。

由利亚「その三世のそっくりさんのクオリティは高杉だけだね。」

二世「そっくりさんではない。俺はキバット・バット二世だ。」

二世がなんか気に入らなかったのか突っ込んでくる。

三世「やっぱり父ちゃんなのか!!」

二世「……………ああ。」

こいつは驚きだよ。三世が二世の子供だったとは。まあ、しばらくは積もる話でもあるだろうし二人だけにしておくとして問題は。

由利亜「ゆーとつ。」

俺の名前を呼びながら左腕に飛び付いてくる。

悠斗「どうした？」

由利亜「とりあえず結婚しよう！式は協会で！！」

悠斗「なんで！？」

由利亜「だってあれって闇のキバでしょ？」

悠斗「知っているのか以外だな。」

由利亜「当たり前だよ。ということだから結婚しようではないか！」

悠斗「すまん。俺が闇のキバを使えるからといってお前と結婚しなくてはいけないんだ。」

由利亜は（´・ω・｀）な顔で俺を見てきた。

そんな顔すんなよ。

由利亜「闇のキバを使えるってことは悠斗はキングなんでしょう？」

悠斗「キングはお前だろう。何を言っているんだ。」

由利亜「私はキング代行。今は本当のキングがいないからクイーンである私がキングの代行をしているの。ちなみに女王と書いてキングと読むんだよ。」

悠斗「何故キングはいないんだ？」

由利亜は少し言いずらそうにしながら答える。

由利亜「私は先代のキングとクイーンの実の娘なの。」

悠斗「娘？そうなのか？」

由利亜「うん。先代のキングとクイーンの間には子供が私も入れて2人しかいなかったんだ。そして二人の間には男の子が生まれなかったんだ。だからキングもいないんだ。それに今のチェックメイトフォーも私以外はいないしね。」

二世「そこまで酷いのか。」

二世も三世との話しが終わったのか由利亜との話しに加わってきた。

由利亜「うん。今も何とか私一人でがんばっているところ。でも二世貴方が戻ってきたことはキングに相応しい人物を見つけて来てくれたってことだよな。」

悠斗「そういうことか。だそうだが二世。」

二世「そういえばそういうことだったな。」

由利亜「相応しい人は悠斗なんだよね。そうなんだよね。だから私と結婚してキングになってお願い！」

こいつはこいつなりにがんばっているんだろう。仕方ないか。

悠斗「だが断る！！」

由利亜「えっ、えええー。なんでなんで！？」

由利亜はそういつと肩をつかみ前後に揺ってきた。

悠斗「俺自由に生きる。誰にも何にも縛られることはなく。しかも結婚なんて、更にはキングなんて思いつき縛り付けられるだろうが。あといい加減揺するのやめてくれ。気持ち悪くなってきた。」
俺は由利亜を引き剥がす。

二世「それと勘違いするなこいつをキングにはしようとは思っていない。」

由利亜「そっそんなあゝ。」

二世が由利亜にそういつと由利亜が地面に膝をつく。

三世「由利亜そんなに落ち込むなよ。由利亜ががんばって良いキングになればいいじゃないか。」
三世が励ます。

由利亜「えー。やだやだー！！悠斗と結婚してイチャイチャしたいよー！！」

由利亜が立ち上がると地団駄を踏み出す。

由利亜以外の三人「……それが理由か！！」「」

由利亜「てへっ。まあ嫌ならしかたないかがんばって私がキングになるよ。」

悠斗「意外と諦め良かったな。」

由利亜「あつ、いつておくけど私が諦めたのはキング云々であつたので結婚のことは諦めてないからよろしくね。」

こいつは……まあそのほうがなんか良いかもな。

三世「悠斗頼みがある由利亜を手助けしてやってくれないかずっととは言わない。少しの間だけでも良い頼む。」

キバット・バット三世こいつもなんだかんだで由利亜のこと大事にしているんだな。

二世「どうする悠斗？」

二世が聞いてくる。

まあ、少しだけなら仕方ないか。

悠斗「ああ。構わない。少しの間だけでよければ。」

二世「お前ならそういうと思っていた。」

三世「ああすまないな助かるぜ悠斗。」

二世と三世が言葉を掛けてくる。

由利亜は何故か顔を赤くしながらニヤニヤしている。

由利亜「じゃあ、ちょっとだけお願いします!」

と喋って何故かキスしてきた。しかも唇と唇で。

何をするんだ!。こいつは!!

などと考えていると調子に乗って舌で俺の歯をこじ開けようとしてきた。

由利亜「んっ、んちゅ。」

ああ。もう我慢の限界だ。

悠斗「調子に乗んなー!!」

おもっいきりビンタした。

由利亜「へぶっ!?!」

女の子にあるまじき声をあげて地面に倒れた。

由利亜「いきなりビンはひどいよ。なんで私はビンタされたの！？」

なんでだと！？

悠斗「いきなりあんなことすればそうもなるだろうが！！」

由利亜「ふえ、だって少しだけなら良いって。」

おもっいつきりビンタしたのになんともないのか。

悠斗「お前は馬鹿か？それはお前を少しだけサポートするという意味だ。」

由利亜「だから精神的な面と性的な面も面倒見てよ。間違っではないでしょ、だからもう一度チューをしよう！さっきの柔らかな唇の感触をもう一度お願いします！」

たこ唇で接近してくる。そこらの怪人よりたちが悪いな。

悠斗「こっちにくんなサポートするっていうの選択間違えたかなあ。」

とりあえずこの世界は少しは平和的に過ごせるかなどと思っていた。だが路地裏で出会った謎の少女イリアのことがなぜか頭の中から離れなかった。何か悪い事が怒るのではないかと。そしてそれがあんな形で実現するとは思っていなかった。

考えと選択（後書き）

駄文でした。すみません。戦闘シーン短くなってしまったー！！

闘いの始まり（前書き）

そろそろキバの世界終わります。展開が早いです。
THE 駄文です。

闘いの始まり

悠斗 side

なんだかんだで由利亜を助けることになってしまった俺。

今は由利亜と一緒に近くの商店街で買い物中、晩ごはんの材料を買いに来ている。

由利亜「ねえねえ悠斗何を買うの？」

悠斗「晩ごはんの材料をちょっとだけ。卵がもうないから。」

由利亜「ふうーん。私またオムライスが食べたいな。」

悠斗「はいはい。わかりました女王さま。」

由利亜「うむ。苦しゅうないぞ。なんちゃって。あはっ。」

なんて会話をしながら買い物済ませ帰ろうとした時、商店街の入り口辺りで爆発音が聞こえた。

由利亜「悠斗今のは！？」

悠斗「ああ。行くぞ。」

爆発音がした場所向けて二人で走り出す。

爆発音がした場所に辿りつく。そこにあったのはライフエナジーを吸い付くされた無数の人々とファンガイアが倒された後に残るガラスだった。

由利亜「酷い。いつたい何が。」

悠斗「人間だけではなくファンガイアもか。」

無差別いや、これは錠破りのファンガイアを止めようとした別のファンガイアが倒されたあとと見るのが妥当か。

二世「悠斗！」

三世「由利亜大丈夫か！？」

家で待機してしてくれた二世と三世も騒ぎを聞きつけ合流する。

由利亜「うん。大丈夫。でもこの惨状はいつたい誰が？」

確かに。これはいつたい何者が。いや考えるまでもないようだ。どうやら向こうから来てくれたみたいだしな。

???「ファンガイアにとって人間はしょせん餌、家畜に過ぎない。だからライフエナジーを吸い付くした。そしてそれを邪魔するならたとえ同胞といえともただではすません。」

由利亜「貴方がこんな酷い事を。」

ビートルファンガイア（以降BF）の行いにして激怒する。

B F「酷い？何を言う。それこそがファンガイアの本能。掟の縛りなどない正しき行いだ。」

由利亜「違うよ！人間とファンガイアは共存することができる。愛し合うことができる。私と悠斗の様に。」

B F「何を馬鹿な。」

悠斗「そうだな。こいつは馬鹿だよ。まっすぐに人を疑う事を知らない。だけど馬鹿だからこそまっすぐだからこそ人を信じられる。自らの誇りと信念を貫く事ができる。それがこいつ紅由利亜だ。愛する云々は知らないがこいつのことは嫌いじゃない。」

由利亜「悠斗私のことそこまで。わ、私も悠斗のこと愛してへぶっ！？」

B F「貴様はなんだ！？」

俺は飛び付いてくる由利亜をアイアンクローで押さえながらB Fに言葉を突きつける。

悠斗「俺は世界を旅する放浪者、旅人だ。記憶しておけよ。」

由利亜「ゆ、悠斗。頭われる。痛い痛い！？」

由利亜をそのままだったかっこつかないなこれは。

悠斗「由利亜すまん。大丈夫か？」

由利亜「あうあ。うん大丈夫。それよりありがとう悠斗。」

悠斗「俺は何もしてはいないが。」

由利亜「それでもね、ありがとう。」

本当に何かしたつもりはないんだがまあ、いいか。それにお客さんも待ちくたびれているようだしな。

B F「ありえない。私は認めない。人間とファンガイアの愛など共存など。」

由利亜「だったら見せてあげる。愛の力を。キバット!!」
三世「よっしゃ。行くぜ由利亜!! かぶつ。」

由利亜「変身!!」

由利亜がキバに変身してB Fに向けて駆け出す。

由利亜「はあああ!!」

B F「くっ!!? なめた真似を。」

向かってきたキバに殴りかかるB F。だがそれをキバは紙一重で避ける。そしてすかさずパンチを連続でB Fの腹に決める。

B F「馬鹿な!! なんなんだこの力は!？」

由利亜「教えてあげる。これが愛の力よ!!」

B F「愛だと。ふざけるな!! そんなもの認められるか!!」

更にB Fがキバに向かって殴りかかるがキバはそれを受け止める。そしてそのまま強烈な蹴りをB Fにおみまいする。

蹴りによつて吹き飛ばされるBF。

BF「まだだ。まだ手はある!!」

そして何処かに向かつて飛び立つ。

由利亜「と、飛べるの!?!?ていうか逃げちゃった。」

三世「いや、違つぜ由利亜。あいつの目指してる方向に。」

二世「キャッスルドランか!?!」

悠斗「なるほど。奴の狙いはキャッスルドランの奪取か。」

由利亜「感心している場合じゃないよ。早く追いつけないと!?!」

悠斗「だな。じゃあ、みんな最後の仕上げに向かうぞ。」

そして俺達は向かう。闘いへと。そこにあるのがなにかも知らずに。そして物語りは最終楽章へと向かつて行く。

闘いの始まり（後書き）

後一話でキバの世界終わります。

最終楽章ゝ真実ゝ（前書き）

キバの世界終わった。何か話しが薄いです。

THE 駄文です。

最終楽章〜真実〜

イリア side

イリア「これでよかったのよね。お姉ちゃん。」

悲しき姉妹の物語りはこれで終わるからね。後もう少し待ってて。

悠斗 side

俺達は今キャッスルドランがいるビルの前にいるがどうやら遅かった様だな。

ギャオー！！

BF「キャッスルドランはいただいた。さあ、滅びるがいい。紛い物のキング、そして人間！！」

キャッスルドランの口から咆哮とともに砲撃が放たれる。

悠斗「くっ！？」

由利亜「キャー！？」

俺と由利亜は吹き飛ばされる。更には由利亜の変身も解けてしまう。

悠斗「由利亜大丈夫か？」

由利亜「何とかね。」

三世「このままだとまずいぜ。」

ここは俺も行くしかないか。

悠斗「二世行こうか！」

二世「その言葉を待っていたぞ相棒。」

由利亜「キバット私たちも行くよ!!」

三世「ああ。奴に目に物見せてやろうぜ。」

キャッスルドランの力を手にしたBFに恐れを抱くことなく二人と二匹の相棒は立ち向かう。

BF「なぜだなぜ圧倒的な力の前に絶望しない。なぜ諦めない!？」

悠斗「簡単なことだ。俺のほうが強いからな。」

由利亜「そこは複数系でしょ。俺達とか。」

悠斗「行くぞ由利亜!!」

由利亜「えっ、無視!? 放置プレイまあいいけど。わかった。」

悠斗「二世!!」

俺は右手を掲げ二世を呼びその手で二世を掴む。

由利亜「キバット!!」

由利亜も俺と同様に右手を掲げ、三世を掴む。

そして俺と由利亜は同時に右手を噛ませる。

二世「ガブリッ。」

三世「かぶっ。」

悠斗と由利亜の身体に魔皇力がそぞこまれる。
そして二人の腰に黒と紅のベルトが巻かれる。

二人が二世と三世をそれぞれ手前に突きだす。そして叫ぶ。
「変身!!」

二人の身体が鎧に包まれる。

そしてそこに立つのは紅きキバ。そして本来はここにこの時期に存在はしなかった闇のキバ。

由利亜「さあ、行くよ!!」

三世「きばって行くぜ!!」

悠斗「さあて行くとしますか。」

二世「ありがたく思え絶滅タイムだ。」
BF「くっ!?!なめるな!!」

そう言っているとBFは再びキャッスルドランの砲撃を放ってくる。

由利亜「まずいくるよ!？」

悠斗「安心しろ。大丈夫だ。はぁー!!！」

俺は闇のキバの能力である波動結界でキャッスルドランの砲撃を止める。

B F「なに!？」

由利亜「凄い。」

悠斗「まだまだ!!！」

砲撃を受け止めきると俺はそのまま波動結界でキャッスルドランの首の上にいるB Fを拘束して地面に叩きつける。

B F「ぐわぁ!!！」

由利亜「よし。今ならいける!!はぁー!!！」

地面に叩きつけられたB Fに向かって走り出すキバ。そのまま殴りかかる。だがそれは難なくB Fに防がれてしまう。

由利亜「うそ!？さっきより力が上がってる!？」

B F「キャッスルドランの力を吸収した私にそんな攻撃などきかない。はぁ!!！」

B Fはキバを殴りつける。キバはその力により吹き飛ばされる。

由利亜「キヤー!!！」

悠斗「くっ！？大丈夫か由利亜！？」

吹き飛ばされたキバを受け止めるダークキバ。

由利亜「うん。何とかね。でも厄介だよあいつ力がさっきより上がってる。だけどこういう時は。」

由利亜は紫色のフェッスルを取り出すと三世にくわえさせようとする。

三世「駄目だ由利亜！！狼達は使えねえ。あいつのせいで狼達の手も吸い取られてやがる。」

悠斗「フォームチェンジは無理と言うことが。」

由利亜「そんな。」

BF「諦める。貴様達に勝ち目はない。」

由利亜「諦めない。フェッスルが使えなくてもたとえ変身できなかつたとしても私は諦めない。この世界が私は好きだから！！」

悠斗「由利亜。それがお前の願いか。なるほど。これがこの世界の旅の意味か。」

そう由利亜の願いを手助けすることが今回の旅の意味だったのかもしれない。

悠斗「俺は由利亜の願いを叶えてやりたい。その切なる思いを。」

旅人は世界と対話する。そしてそれは形となる。

悠斗の手にフェッスルが形どられる。そのフェッスルは虹色の輝きを放っていた。

由利亜「悠斗そのフェッスルは？」

悠斗「この世界のいや俺の旅の答えだ。」

そう答えると俺はそのフェッスルを二世に吹かせる。

二世「ガルルセイバー、バッシャーマグナム、ドッガハンマー。」

世界は時間の針を進めた。

そしてフェッスルは三つの音色を奏でていた。

その音色は紅きキバを三色に彩る。

右手はガルルの青。左手はバッシャーの緑。
胸はドッガの紫。

本来三つのアームズモンスターがいなければなれないキバ・ドカバキフォームである。

今は悠斗の使ったフェッスルの力でその姿に至った。

由利亜「何これ、凄い。凄いよ。力が溢れてくる。これならいけるよ。」

悠斗「ああ。一気に決めるぞ由利亜！！」

そう言つと俺達はそれぞれ二世と三世にフェッスルを吹かせる。

三世「ウェイクアップ!!」

二世「ウェイクアップ?。」

紅き夜が来訪する。

キバのカテナの封印が解かれる。

ダークキバの両足に魔皇力が集中する。

B F「馬鹿なんだ、キバのあの姿は!?くっ!?負けるわけには
いかない!!」

B Fは自らの羽を羽ばたかせ衝撃波を作りキバとダークキバを攻撃
する。

だがそれよりも早く二人のキバが上空に舞いあがる。

由&mp・悠「はああー!!」

そしてキバのダークネスムーンブレイクとダークキバのキングスバ
ーストエンドがB Fにたたき込まれる。

B F「ぐうおおおおおー!!」

B Fは吹き飛ばされ、ビルに叩きつけられる。そしてそのビルごと
爆発する。

由利亜「やったの?」

悠斗「ああ。俺達の力だな。」

悠斗「中に誰がいるのか？まあいい。入ってみるか。」

どうやら中は楽器、音楽関係のものが保管してある場所みたいだ。

もの音がしたのはもっと奥。そこにいつてみる。

そこにいたのは由利亜と俺が倒したと思っていたBFだった。あれを受けてまだ生きているとは。だがもう虫の息のようだ。

悠斗「あれを食らってまだ生きているとは存外にタフだなイリア。」

BF「!？」

BFの姿が揺らいだ。そこにいたのは路地裏で出会った少女イリアだった。

イリア「いつから気付いてたの？」

悠斗「由利亜が愛だの何だのいつていた辺りでかな。」

イリア「気付いてたのに思いっきりやるなんてけっこう酷いね。」

悠斗「そんなことはどうでもいい。それよりもお前はこれで満足なのか？」

イリア「満足ねえ。よくわかんないや。お姉ちゃんならきつと良い

王になれると思うよ。」

悠斗「やはりお前は由利亜の……。」

イリアは俺の言葉を聞いているのかいないのか知らないが近くにあったバイオリンを手にとると抱き締めた。

イリア「私のお父さんバイオリンが上手でね、よく弾いてくれたんだ。」

俺はイリアの持っていたバイオリンを奪い取ると顎を乗せ、弾き始める。

イリア「弾けるんだユート。意外だなあ。バツハだねえ。何だか懐かしい気持ちになって来た。」

俺はもう何も問わない。ただ最後まで弾くだけ。

イリア「ユート、お姉ちゃんをよろしくね。それとありがとう。」

そういつてイリアの命の灯火は消えていった。

由利亜「悠斗こんなところにいたんだ、探したんだからね。」

それと入れ替わるようにして由利亜が現れる。何故か黒いウェディングドレスで。

悠斗「お前その恰好は何なんだ？」

悠斗「自業自得だ。」

由利亜「ブーブー。でどうやって次の世界に行くの？」

二世「この魔テレビで行くのだ。」

由利亜「えー。こんなレトロなテレビでホントに別の世界にいけるの？」

二世「ものは試しだ。」

ダイヤルを回す二世。翼で回してる器用だなあ。

ドゴン。

そんな音と共に別の世界に移動した。

由利亜「びつくりした。今で別の世界に移動したの？」

悠斗「窓の外を見て見る。」

由利亜「えっ、なになに？うっわっ！！おっきなお山さん。」

悠斗「あれ山は九郎ヶ丘ということはここはクウガの世界か。」

クウガの世界

未確認生命体グロンギと闘う古代の戦士。

最終楽章〜真実〜（後書き）

次回「クウガの世界・花の少女。」

「私は何なんだろう?。」

「お前はお前だ。」

「しなきゃならないことがあったような気がする。」

「さあ、貴方の力を見せて悠斗!!。」

「最初に言っておく俺はかーなーり強い!!。」

「残念だが俺はさーらーに強い!!。」

「悠斗は私が守る。超変身!!。」

「G3ならグロンギにも対抗出来ます。」

「着装なんちゃって。」

「zzz。」

「力二卵まー!!。」

「お前がクウガ。」

「俺は甘くはない!!。」

「お前が俺を守るなら俺がお前を守る。」

旅人は旅をする。
そして世界を進める。

ごめんなさい。やってみたかったです。

クウガの世界 花の少女（前書き）

クウガの世界。

グロング語を使ってみたが微妙。

クウガの世界 花の少女

悠斗 side

今は家の中でテレビを見ている。

もちろん魔テレビで。このテレビでも普通に番組なんかを見ることができる。

テレビでこの世界の情報集めと言うこと。

今まで集めた情報をまとめると……

一つ、九郎ヶ丘で謎の古代遺跡が発掘された。

二つ、遺跡を発掘した調査団が謎の死をとげた。

三つ、この世界ではまだグロンギは見つかっていない。これに関しては警察が非公開にしているだけかもしれないが。

悠斗「ふう。やっぱり一般公開の情報ではこんなものか。」

自家製クッキーを摘まみつつ同様にクッキーを食べているキバット・バット三世に話しかける。

三世「モグモグ。まあ、そんなもんだろ。やっぱり自分の足で稼がないとな。」

悠斗「やっぱりそうなるか。じゃあ、行きますか。」

クッキーにラップをかけテレビを消す。

扉に手をかけノブを回す。

三世「俺も付いていっても良いか？」

悠斗「構わないけど由利亜は？」

三世「爆睡中。」

悠斗「ああ。なるほどね。」

たわいない話しをしながら外にでる。

すると銀色のオーロラが俺の身体を通り抜ける。

三世「何だ今の？って何だその恰好！？」

そう今の俺は警察の恰好をしている。

何故こうなったかというと世界から最適な役割をもらったから（仮面ライダーディケイドの土の様なもの）。

悠斗「どうやら警察の様だが。ああなるほどね。」

胸ポケットに入っていた警察手帳を開いて見て見ると納得できた。

三世「なんて書いてあるんだ。」

俺は警察手帳を三世に見せながら答える。

悠斗「警視庁所属特別開発室主任 麻生悠斗。」

三世「何なんだその肩書き？」

悠斗「さあ、何なんだろうね。取りあえず九郎ヶ丘の遺跡に行ってみようか三世。」

九郎ヶ丘を指差しながら三世に話しかける。

三世「わかったぜ。あそこに何かあるんだろ。退屈しのぎにはちょっとよさそうだしな。でもけっこう距離があるぞどうやって行くんだ？」

悠斗「その言葉を待っていた。これを見てくれ。」

指をパチンと鳴らすと先ほどと同じように銀色のオーロラが現れそして消える。

そこには一台のバイクがあった。

三世「バイクか。」

悠斗「ああ。その名をマシンデイレイダー!!」

(見た目はマシンデイケイダーの色ちがい銀色と青。)

悠斗「取りあえず九郎ヶ丘に向かおうか。」

三世「了解だ。」

少年とコウモリばく走中。

そのころ……

由利亜「すこー!! z z z z z!!」

由利亜はやっぱり爆睡していた。

悠斗 side

悠斗「ここが発掘された遺跡か。」

三世「意外とでかいな。あそこが入り口か？」

確かに入り口らしき場所があるが K E E P O U T のテープが引いてあって入れないようになっていた。

悠斗「じゃあいくか。」

三世「いいのか入って？」

普通なら不法侵入にでもなるのかもしれないが関係ない。

悠斗「だって俺警察だから。」

三世「それもそうか。」

少年とコウモリ探索中。

しばらく色々見物していると何やら棺桶らしきものがあつた。

悠斗「これは？」

三世「何か見つかったのか？」

悠斗「これを見てくれ。」

三世「棺桶か？なら開けてみようぜお宝が入ってるかもしれないぞ。」

悠斗「宝ねえ。開けて見ないことには始まらないか。」

俺は棺桶を開けようと触れてみる。

その時……

ドクン

何か脈打ったような感覚が棺桶から感じた。

三世「どうした？」

悠斗「いやなんでも……ない。」

気にせず棺桶に手を触れ蓋を一気に開ける。

意外と簡単に開いた。これはたぶんすでに開けられたのだろうな。

そんなことを考え蓋を開けきり中を見るとそこには………

………
一人の少女が眠っていた。

??? side

???「動き出したわね。」

???2「この世界が?」

???「ええ。この世界の物語りがね。」

???2「悠斗さんはどう関わっていくんだろっね。」

???「さあでもきつと楽しませてくるね。」

???2「ねえねえ、今回は私にやらせて。」

???「構わないわ。じゃあわたしはしばらく裏にいるわね。」

すると少女の服装が黒い魔女の様な姿から白い聖女の様なもの姿に変わった。

悠斗 side

俺は今困惑している。この状況で困惑しない奴がいたら変わってほしい。

三世「女の子？昼寝でもしていたのか？」

悠斗「さすがにそれはないだろ。」

俺は彼女の首、頸動脈に触れる。だがその瞬間少女に手を捕まれた。

悠斗「!？」

少女「暖かい。」

俺の手を両手で包み込むようにして少女は握る。

少女は目を開ける。 起き上がり俺と三世交互に見る。

少女「誰？」

首を傾げながら聞いてくる。

悠斗「俺は悠斗。こいつはキバット・バット三世だ。」

三世「よろしく頼むぜ。お前はこんなところで何してたんだ昼寝か？」

少女「わからない。」

三世「じゃあ、名前は？何処からきたんだ？」

少女「わからない。」

悠斗「もしかして記憶喪失なんじゃないか？」

三世「そうなのか？」

少女「わからない。ただ……………」

悠斗「ただ？」

少女「なにかしなきゃならないことがあったような気がする。」

この少女の姿。

この少女の状態。

まるでグレイセスの世界で出会ったあの花の名の少女のようだ。そう彼女の名前は確か……………」

（悠斗はティルズオブグレイセスの世界行ったことがあります。）

悠斗「ソフィ。」

少女「???」

三世「なんだ？」

悠斗「この娘の名前なのかもしれない。」

三世「そうなのか。良い名前だな。」

ソフィ「ソフィ、ソフィ。私の名前。」

彼女、ソフィもどことなく嬉しそうである。

悠斗「それでソフィこれからどうする？いつまでもここにいていいかい？」

ソフィ「悠斗と一緒にいい。」

即答して俺の手をにぎるちからを強くする。

三世「人気ものだな悠斗。」

ニヤニヤしながら三世が話しかけてくる。

悠斗「茶化すな三世。ではソフィ一緒にいこうか。」

ソフィ「うん。」

少年、少女とコウモリ移動中。

遺跡の外に出る。

???「君達何をやっているんですか？ここは関係者以外立ち入り禁止ですよ。」

警察らしき人物に話しかけられた。

悠斗「警視庁所属特別開発室主任 麻生悠斗だ。」

警察手帳を見せながら答える。

真「け、警視庁！？失礼しました。自分長野県警の氷川真です。失礼ですがこのようなところで何を？」

綺麗な敬礼をして返事を返してくる。彼女も警察手帳をみせてくれた。

悠斗「この遺跡で起こった調査団の謎の殺人事件の調査をね。」

氷川「調査ですか。それで何かわかったことが？」

悠斗「一つわかったことが。」

氷川「それはいつたい？」

悠斗「この事件は人が起こせるものではない。こんなことができるのは特殊な力を持った人物か未知の生物だ。」

氷川「未知の生物……………」。

話を聞いて何やら俯く氷川。

ソフィ「どうしたの？」

氷川「い、いえ。ところで君は？」

悠斗「彼女はソフィ俺の助手ですよ。」

氷川「助手ですか！？こんな小さな子供が？」

悠斗「氷川さん人を見た目で判断するのはどうかと思いますよ。それに貴女もそう判断されるのは嫌でしょう。」

氷川「は、はい。失礼しました。ところで貴方に極秘な話したいことが。長野県警まで来てもらいたいのですがよろしいでしょうか？」

悠斗「わかりました。ですがしばらく時間をもらっても構わないでしょうか？」

氷川「構いません。では明日の10時に長野県警の前に来てください。」

悠斗「わかりました。では失礼します。」

移動中……………

ソフィ「ねえ悠斗これからどうするの？」

ソフィが服の裾を引っ張って聞いてくる。

悠斗「そうだなとりあえず……………」

ぐうー（ソフィのお腹の音）

悠斗「ご飯にしようか。」

ソフィ「ご飯？」

悠斗「そうご飯。これに乗って行くのか。」

マシンディレイダーを指差しながらソフィに言う。

ソフィ「これはなに？」

ソフィがマシンディレイダーをぺたぺたと触る。

三世「なあ悠斗。」

何処からともなく三世があらわれる。

悠斗「ん？そういえば何処にいたんだ？」

三世「ああ人がいたのが見えたから岩影に隠れてたんだよ。それよりさっきの警察の姉ちゃんにいったのって……………」

悠斗「ああ。あれでまかせ。」

三世「やっぱりかー。でも良くあんなの思いついたな。」

悠斗「思いついたというかすでに知っていたというのが正しいかな。」

三世「どういうことだ？」

悠斗「それは……………」

三世の言葉に答えようとするが待ちくたびれたソフィが俺の身体を

揺さぶる。

ソフィ「悠斗まだ？」

悠斗「そうだね。じゃあ、行こうか。」

ソフィの頭を撫でる。

撫でられた頭を不思議そうに触るソフィ。

悠斗「三世さっきの話はまた今度と言つことで。」

そういつと俺はソフィをバイクの後ろに乗せ走り出す。

三世「しょうがねえなあー。」

そう言いつつ悠斗達を追いかけるキバット・バット三世であつた。

場所は変わって山の途中。

悠斗「……ん？」

急に止まる悠斗。

三世「どうしたんだよ？」

悠斗「何か聴こえる羽の羽ばたきの様な音。」

ソフィ「……？」

ソフィと三世が不思議そうにしていると。

悠斗「ソフィ伏せろ！！」

ソフィ「？」

ソフィにそう言うが理解できていないのか首を傾げるだけである。

仕方なくバイクごと横倒しにする。

悠斗とソフィがいた場所を何かが凄いスピードで通過していった。

そしてそこにコウモリの姿を摸したグロンギ、ズ・ゴオマ・グがいた。

ズ・ゴオマ・グ「ゲガビバツデログリント！！」

悠斗に向かって飛翔するズ・ゴオマ・グ。

悠斗はそれをしゃがみつつ蹴りをいれる。

だがそれをものともせず地面に着地するズ・ゴオマ・グ。

悠斗とズ・ゴオマ・グが相対する間に悠斗を守るようにしてソフィが立つ。

ソフィ「た・わなくちゃ。」

悠斗「ソフィどうした？」

ソフィ「私思い出しの。戦わなくちゃいけないって。あれを倒さな

いといけないって。」

その言葉と共にソフィの腰にその内にアマダムを秘めしアークル、クウガのベルトが出現する。

ズ・ゴオマ・グ「ボゼパテスドンクウガ」

ソフィ「はぁー!!」

ズ・ゴオマ・グに向かって走り出すソフィ。その身体を白い鎧が包み込む。

そしてその勢いでズ・ゴオマ・グに殴りかかる。

吹き飛ばされるズゴオマグ。

そしてそれをなした存在は大地に立つその姿は古代の戦士……

悠斗「仮面ライダークウガ。」

クウガの世界 花の少女（後書き）

駄文でするよ。すいませんでした。

クウガの世界登場人物紹介（前書き）

クウガの世界登場人物紹介。

クウガの世界登場人物紹介

クウガの世界登場人物紹介

仮面ライダークウガ 変身者名前 ソフィ

見た目 テイルズ オブ グレイセスのソフィ

遺跡の中に眠っていた少女。

悠斗によって偶然眠りから目覚めさせられた。悠斗になついている。キバット・バット二世、三世とは友達のような関係。

由利亜にはなつかず毛嫌いしている。（悠斗を自分から取ろうとしていると思っているから。）

かに玉が好物である。

悠斗はクウガの世界では仮面ライダーG3になる。

本来この時期には完成していなかったが悠斗が技術開発主任（この世界での役目。ディケイドの士のようなもの）として開発に携わったため完成した。

氷川真

見た目 魔法少女リリカルなのはのギンガ・ナカジマ

性格 真面目、少し融通がきかない。不器用。

長野県警の女刑事。未確認生命体の事件を追っている。

悠斗を尊敬している。

クウガの世界登場人物紹介（後書き）

まあ、こんな感じです。増えたら追加していきます。

クウガ覚醒そして協力（前書き）

展開はよいですが許して下さい。

ではどうぞ。

クウガ覚醒そして協力

氷川 side

今私は九郎ヶ丘遺跡で出会った警視庁の麻生悠斗という男性の事を上司に報告しにきているところです。

???「なるほどね。その麻生悠斗っていう男は遺跡の中を調査しただけで未確認まで到達したわけね。」

そう言いつつ腕を組むのは私の上司、小沢香織さんである。

???「でもなんか怪しくないっすか？警視庁の刑事がこんなところまでくるなんて。」

と首を捻っているのは私の後輩の御室貴弘さん。

氷川「いえ彼は刑事ではなく確か警視庁所属の、えーと。」

小沢「なによはつきりしなさい。もしかして忘れたんじゃないんでしょうね。」

氷川「うっ……。」

御室「わすれたんすね。」

氷川「すいません。でもじつは明日会う約束をしているんですよ。」

小沢「私たちも会っわ。どんな奴か顔を見て見たいしね。」

御室「私たち？」

小沢「当然貴方もよ。」

御室「俺もですか!？」

小沢「当たり前じゃない。」

なんて小沢さんと御室さんが言い合いをしている時……。

警報「九郎ヶ丘遺跡付近にて未確認生命体出現。繰り返す九郎ヶ丘遺跡付近にて未確認生命体出現……。」

小沢「氷川君Gトレーラー発進よ。」

氷川「でも上からG3ユニットは当分謹慎だと。」

そう前回の出撃で味方に損害を与えてしまったため謹慎になっていた。

小沢「謹慎は取り消しになったわ。理由はわからないけどね。文句は言わずに出発よ。」

いったいなにがなにやら。

悠斗side

今俺の前ではズ・ゴオマ・グとソフィいや仮面ライダークウガグロ
ーイングフォームが戦っていた。
三世「おい悠斗あれって。」

悠斗「クウガ、この世界の仮面ライダーだ。」

三世「白いんだな。」

悠斗「いや本来の基本フォームは赤いんだ。あれはグロウイングフォーム確か変身者が弱っていたり戦いに迷っていたりするとあの姿になるんだ。」

三世「ソフィは大丈夫なのか？」

悠斗「さあね、でも危なくなったら助けるよ。」

俺はクウガとズ・ゴオマ・グの戦いに目を向ける。

ソフィ「はぁー!!」

クウガのパンチがズゴオマグに入る。だがそこまでダメージが与えられないようだ。

ズゴオマグ「ふんっ!!」

ズゴオマグが羽を飛ばたかせ上空に飛び立つ。その飛ばたきでクウガが少し吹き飛ばされる。

ソフィ「くっ!?!」

直ぐに立ち上がり反撃しようとするクウガ。だが上空からの攻撃にても足も出ないようだ。

三世「おい悠斗まずいんじゃないのか？」

悠斗「助けたいのは山々なんだが二世がないから変身出来ないんだよね。」

三世「なんだそりゃー!!」

などと三世と言い合いをしていると……

ウーン！ ウーン！（サイレンの音）

サイレンの音がしてきたその方向を見るとGトレーラーがあつた。

悠斗「この段階であれがあるということはもしかしたらG3も……」

予想道理というかGトレーラーからG3があらわれる。

G3「貴方は何故ここに!？」

悠斗「貴女はまさか氷川さん？」

氷川「ええ。とりあえずここは危険です。下がってください」

氷川がライフルを構える。

氷川「未確認どうしが戦っているのか!？」

氷川がクウガにまでライフルを向ける。

悠斗「待って氷川さん白い方は味方です。俺を守ってくれました。」

その時ズ・ゴオマ・グが飛行しながらこちらに向かって来た。

ソフィ「悠斗だめ逃げて!?!」

ソフィが身をていして悠斗を守る。

氷川「未確認が!?!」

ソフィ「させない。悠斗は私が守る!?!はぁー!?!」

ソフィが叫ぶとクウガの装甲が白から赤へと変わる。

赤き炎の戦士クウガマイティフォームである。

ズゴオマゲ「!?!」

氷川「変わった。」

ソフィ「一気に決める。超変身!?!」

続いてクウガが緑の姿にかわる。クウガペガサスフォームである。

悠斗「氷川さんそれ貸して。」

氷川「ちょ、ちよつと!?!」

氷川からライフルを借りる。そしてソフィに投げ渡す。

悠斗「ソフィこれを使え!?!」

悠斗からライフルを受けとるソフィ。ソフィがライフルを受け取った瞬間ライフルがその姿をペガサスボウガンへと変わる。

ソフィ「うん！これで決まれえー！！」

ペガサスボウガンから緑のクウガの必殺技　ブラストペガサスが放たれる。

ズゴオマゲ「ぐうおおおおおおー！！」

クウガの刻印がズ・ゴオマ・グに打ち込まれ爆発する。

氷川「凄い。」

悠斗「やったか。ソフィ大丈夫か？」

ソフィを心配して駆け寄る悠斗。なぜならペガサスフォーム、緑のクウガはかなりの力を消耗する。下手したら大変な事になるほどに。

だが……

ソフィ「大丈夫だよ。悠斗怪我はない？（*^|^*）」

変身を解いたソフィがニコニコと微笑んでいた。

悠斗「本当になんともないのか？」

ソフィ「うん。ただ凄くお腹すいた。ご飯たべたい。」

悠斗「じゃあ、食べるに……行くのは難しいか。」

なぜならG3がライフルを構えて立っていた。

氷川「話を聞かせてもらえますか。」

悠斗「明日ではなかったんですか？」

氷川「状況が変わりました。嫌なら力ずくでも！」

ライフルを構え直す氷川。

ソフィ「悠斗に手出しはさせない!!」

俺と氷川の間立つソフィ。

こついうのを一触即発の空気とでも言うのかな。

そんなとき……

小沢「やめなさい氷川君!!」

Gトレーラーから女性が降りて来た。

氷川「小沢さんなんで!？」

小沢「貴女を止めに来たのよ。」

悠斗「貴女は？」

小沢「私はG3ユニット主任の小沢香織よ。よろしく。さっそくだけど話を聞かせてもらって良いかしら？」

悠斗「はい。こちらこそお話がしたいと思っていましたし。でも条件が。」

小沢「条件？」

悠斗「この娘ソフィには何もしないこと。それと美味しいカツ丼でも食べさせてくれませんか？なにぶん空腹で辛くて。」

小沢「カツ丼って、貴方面白いわねえ。いいわ、美味しいの用意してあげる。もちろんその娘にも手は出さないわ。」

悠斗「話しが分かる人で助かりました。ソフィもう大丈夫だから落ち着いて。」

ソフィ「うん。悠斗がそう言うなら。ところでカツ丼って美味しいの？」

悠斗「それは食べてからのお楽しみ。」

氷川「えっ、えーと。えー！？」

悠斗「氷川さん不器用とか空気読めないとか言われませんか？」

氷川「なぜそれを！？」

小沢「じゃあ、行くわよ。」

悠斗「そうですね。」

トレーラーへと向かう悠斗達。

氷川「お、置いていかないでください！！」

三世「危機一髪だぜ。」

ちなみに三世は木の影に隠れていたようだ。

移動中……。

長野県警Gトレーラー内部。

小沢「つまりこの娘が古代の戦士クウガというもののなわけね。モグモグ」

悠斗「簡潔に言えばね。モグモグ」

氷川「でもなんで彼女の様な子供が？モグモグ」

悠斗「遺跡の古代の文によると心清きものがとか書いてあった。だからこそソフィの様な子供なんだろう。モグモグ」

ソフィ「モグモグ。（*^ー^*）」

みんなでカツ井モグモグしながらソフィの事やら話しています。

御室「小沢さんカツ井の代金どうします？モグモグ」

小沢「御室君お願い。」

御室「僕ですか!？」

小沢「貴方以外に何処に御室がいるのよ!」

なんか口喧嘩が始まってしまった。

氷川「気にしないで下さい。あの二人はいつもあんな感じですから。」

悠斗「ほうほう。」

ソフィ「悠斗〜」

俺に抱きついてくるソフィ。なんか甘えん坊になってないか？

氷川「仲が良いんですね。」

ソフィ「うん。」

悠斗「はははっ。」

悠斗「小沢さんちよっといいいですか？」

口喧嘩中の小沢に話しかける。

悠斗「G3ユニットは警視庁所属になりましたからね。まあ、そんなわけで自分がここに派遣されて来たんですよ。共同開発者として自分は重火器を担当しますんでよろしくお願いします。」

小沢「もう何言われても驚かないわ予想出来てたからね。こちらこそよろしく。」

悠斗「氷川さん、御室さんもよろしくお願いします。」

氷川「ええ。こちらこそ。」

御室「よろしくお願いします。」

説明も終わり今はソフィと一緒に手を繋いで帰宅中。

バイクに乗って帰ろうと思ったがソフィがこっちの方が良いとの事で帰宅中である。

ソフィ「悠斗、カツ丼おいしかったね。」

悠斗「ああ。にしてもソフィ身体きついところないか？」

ソフィ「お腹がパンパン。」

悠斗「そ、そうか。」

しかしおかしい。原点のクウガであるあの人でさえペガサスフォームへの変身はかなりの負担になっていたそれなのにソフィはなんともないなんて少し何かありそうだな。

そんなことを考えていたせいかな後ろから接近銀色のオーロラにきずけなかった。

ソフィ「悠斗後ろ！？」

ソフィの声で気づいた時には遅く俺は銀色のオーロラに飲み込まれてしまった。

ソフィ「悠斗、何処にいったの悠斗！？」

場所は変わり何処かの海の波打ち際そこに悠斗はいた。

悠斗「キバの世界と言い確実にDシステムが関わっているな。いったい誰が？おっとどうやらお出ましか。」

悠斗の前に緑のライダー時を守るライダーの一人

「最初に言っておく俺はかーなり強い!!」

仮面ライダーゼロノスが立っていた。

クウガ覚醒そして協力（後書き）

次回????と????の二人?の少女がですが今度から白い聖女
ね恰好した方を白聖女、黒い魔女の恰好をした方を黒魔女と書きま
す。

駄文でしたがとうございました。

???
(前書き)

???

???

??? side

二人の人影がそこにいた。

少女「ねえ、貴方には大切な物はある？」

子供「うん。お父さん、お母さんそれに妹がいるんだ。」

少女「家族ね。それが貴方の大切な物なのね。」

子供「うん、そうだよ。でもなんでお姉さんはそんなことを聞くの？」

少女「フフフ。さあなんででしょ？」

子供「????わかんないよ。」

少女「良いわね坊や汚れを知らない純粹な目をしている。」

子供「うん？」

少女「今はまだいいわ。でもね、いずれ貴方は知るわ絶望を憎悪を。そしてきつと私を理解して愛してくれるわ。その時にまた会いましょう坊や。」

すると少女は子供の前から少女は消えていた。

子供「????お姉さん？」

子供は暫く不思議そうにしていたが

妹「お兄ちゃん！」

子供「うん。今行くよ。ルウ」

妹が迎えに来た為に子供は少女のことを忘れてしまった。

だが子供は後悔する。その事をどうして忘れてしまったのかと。だが運命は時は容赦しない。

そして世界は周りだす。

???(後書き)

???

早すぎる進化とペロペロ（前書き）

ソフィキャラ崩壊です。

勘弁してください。すいません。

後いつも通り駄文です。

早すぎる進化とペロペロ

ソフィside

ソフィ「悠斗消えちゃった。」

キヨロキヨロと悠斗を探すソフィ。

ソフィ「？何か変な感じがする。あっちだ。」

何かを感じ走り出すソフィ。

ソフィ「ここに何かある。悠斗ここにいる？」

公園らしき場所についたソフィさらに違和感が増す。

その空間に歪みをソフィは見つけ手を触れようとする。

ソフィ「この中に悠斗がいる。なら……つつっ！」

ソフィが歪みに触れた瞬間雷がほとばしる。

ソフィ「ビリビリする。でも悠斗がこの中に、助けなくちゃ。ぐうううー!!」

ソフィは気にせず歪みに手を掛けこじ開けようとする。

ソフィ「待ってて悠斗今行くから。」

悠斗 side

ゼロノスがゼロガッシャーを組み立てて振ってくる。

ゼロ「最初に言っておく俺はかーなり強い!!おりゃ!!」

悠斗「おっと危ない危ない。なら俺はさーらーに強い!!」

ゼロノスがさらに斬り掛かってくる。

悠斗「あーもう、しつこい!二世がいらないから変身出来ないし。」

斬撃を紙一重で避けながら対象方を考える俺。

(最悪あれを使うしかないかな。)

そんなことを考えていたせいか……

ゼロ「はっ!!」

悠斗「ちっ!?!」

ボウガンへと姿を変えたゼロガッシャーの射撃を避けきれずに右足にかする。

悠斗「つつ!?!」

浅くだが切ってしまったようだ。右足の太ももから出血する。

ズボンを破り直ぐに傷口に結びつける。

（いたしかたないか。これは使いたくなかったけど。）

俺はそう言つと懷から一枚のカードを取り出そうとする。

だがその時は

《ズドーン！！》

まるで雷が落ちたような音がした。それと共に空間にひび、割れ目ができた徐々に広がって行く。
そしてそこには

ソフィ「悠斗大丈夫！？」

ソフィが立っていた。

白聖女 s i d e

白聖女「上手くいった。良かった。」

黒魔女「けっこうえげつない事を考えるわね貴方。」

白聖女「えへへありがとう。」

黒魔女「ほめた覚えはないんだけどね。」

白聖女「あっ、右足に当たった。ズボン破ちゃった。キャー！！生太もも来たよー！！ああん、あの白くて綺麗な太ももにしゃぶりつきたいよ。」

黒魔女「うるさいわね。たくっ。あら出血しているじゃない。どうせなら血を啜りたいところね。」

白い聖女「それも良いね。あっ！！悠斗さんあれを使ってみたいだよ。」

黒魔女「本当ね。ふふっ。こんな段階で彼のあの姿を見れる何てね。さあ、楽しませてもらう……」

《ズドン！！》

白聖女「えーなんであのクウガがここに！？」

黒魔女「一体何が起きたと言うの！？」

彼女達さえ予測することの出来なかったイレギュラー。仮面ライダークウガことソフィがその場にいた。

黒魔女「あり得ないはDシステムを持たないものがここに来るなんて！？」

悠斗side

ソフィ「悠斗大丈夫！？」

ソフィが俺に駆け寄ってくる。

悠斗「ソフィがなぜここに!?!」

ソフィ「よく分からないのでもなんとか来れたよ。」

悠斗「……そうか。ありがとう、ソフィ。」

ソフィの頭を撫でる

ソフィは目を細めてくすぐったそうにする。

ソフィ「!?!悠斗足から血が出てるどうしたの!?!」

目を細めていたソフィが俺の足の傷口に気づく。

悠斗「ああこれは。」

ソフィ「あれのせい?」

ゼロノスを指差すソフィ。

悠斗「まあ、そうなるな。」

ソフィ「そう、わかった。」

ゼロノスに向かって走り出すソフィ。。

ソフィ「これ以上悠斗は傷つけさせはしない。変身!?!」

ソフィの姿がクウガへと変わる。

クウガがゼロノスへと殴りかかる。

ソフィ「はっ!!」

ゼロ「おりゃ!」

だがゼロガッシャーで防がれ、斬りかえされる。

一旦距離を取るクウガ。

ソフィ「超変身!!」

クウガはマイティフォームから紫のクウガ、タイタンフォームへと姿を変える。

そしてゼロノスに向かって再度走り出すクウガ。

だか……………。

ソフィ「ぐっ!?!」

急にうずくまるクウガ。

悠斗「どうしたソフィ!?!」

ソフィ「なんかビリビリする。でもなんか力が溢れてくる。」

悠斗「ビリビリ?……………まさか!?!」

俺はその言葉でクウガのとあるフォームを思い出す。だがあり得ないくらいなんでも早すぎる。

ソフィ「超変身!!」

アークルが金色に変わりクウガの身体に雷がほとばしる。

そして俺の眼前にはクウガライジングタイタンフォームが佇んでいた。

白聖女 side

白聖女「あり得ないよ。あれなんでこうなってるのー！！私聞いてないー！？」

黒魔女「私だって分かんないわよ！少し静かにしていなさい！ライジングあれがそうだとするならゼロノスでは部が悪いわね。今回はここまでかしらね。」

白聖女「ふえーん。次は負けないんだからねー覚えてなさいねー！！！」

まだ決着付いていないのに……………。

悠斗 side

そこからは圧倒的であった。

ソフィがゼロガツシャーをゼロノスから奪うとそれをライジングタイタンソードに変えた。

圧倒的な力でゼロノスを斬りつけるクウガ。なす術もないゼロノス。ベガフォームもしくはゼロフォームになれば違うだろうがあれはDシステムによって呼び出されたライダーだからフォームチェンジは出来ないのだろう。

呼び出した本人が直接フォームを変えるカードを使えばなるかもしれないがどうやら気配がないことから消えたか。

ソフィ「はぁー!!」

クウガのライジングタイタンソードに雷がほとばしる。どうやら決めるようだ。

ソフィ「悠斗私を守る!!」

ライジングカラミティタイタンがゼロノスに決まる。

だがそれと同時に爆音と共に閃光が視界を埋め尽くす。

目を開けるとどうやら公園らしき場所についていた。

九郎ヶ丘が見えることから元の世界だということがわかる。

ソフィ「悠斗!！」

どうやらソフィも一緒に戻って来ていたようだ。
今思いっきり飛び付いてきた。

悠斗「くっ!？」

足の痛みのせいで膝をついてしまう。

ソフィ「ごめん、悠斗いきなり飛び付いて。」

シュンとするソフィ。犬耳があつたら垂れているだろうな。

悠斗「大丈夫だよ。ちょっと驚いただけだから。」

そういつてソフィの頭を撫でる。

だが納得できていない顔だ。

ソフィ「まだ血も出てるよ。そうだ!悠斗足出して。」

いきなり声をあげ俺の足を引っ張るソフィ。

ソフィ「んちゅ。れろれろ。」

ソフィは俺の足に巻いていた布をほどくと足の傷口をなめてきた。

悠斗「ちよっ！？ソフィやめっ！？なにを」

ソフィ「傷口を消毒しているんだよ。んっ、ずちゅー。ちゅぱっ。美味しい。」

悠斗「ソフィ止めてなんか変な感じがっ！？っう。」

ソフィ「悠斗もっというんなところも舐めてあげるね。」

ソフィはとろんとした微笑みで俺の首筋に唇を当ててきた。

悠斗「ひゃー！？」

覚えていたのはそこまででその後は記憶がない。ただ目が覚めた時には肌がツヤツヤしてニコニコ（*^ー^*）していたソフィが目の前にいた。

それと服がはだけていてなぜだか身体中がベタベタしていた。

ソフィ「悠斗ごちそうさま。」

早すぎる進化とペロペロ（後書き）

ちなみに由利亜と二世はクウガの世界ではあまり出ません。

究極の闇改変（前書き）

クウガの世界後1話か2話位で終わらせる予定です。

究極の闇改変

悠斗 side

今俺はGトレーラー内部でモニター越しにクウガとG3の戦いを見ていた。

ソフィ「はっ!!」

氷川「喰らえッ!!」

クウガライジングペガサスのライジングペガサスボウガンが火を吹きグロンギを蹴散らす。

G3のランチャーが敵をなぎ倒す。

以前とは比べられないスピードでグロンギ二体を殲滅するクウガとG3。

爆散するグロンギ。

悠斗「よしっ!」

小沢「やったわね。」

御室「お見事!」

トレーラーから降りて二人のところに駆け寄る。

ソフィ「悠斗!」

変身するとき俺に駆け寄ってくるソフィ。

悠斗「良くやったなソフィ。身体は大丈夫か？」

頭を撫でつつ聞いてみる。

ソフィ「うん。大丈夫だよ。」

氷川「麻生さん！」

G3を解除した氷川が小沢さん、御室さんと一緒に俺の元に来る。

悠斗「どうしたんですか氷川さん？」

氷川「貴方と小沢さんが改良したG3凄いです。今までとは比べられない。これで未確認と互角いやそれ以上に闘えます。」

少し興奮気味である。

顔が近い。

小沢「氷川君さつきからその調子なのよ。まったく少しは女性らしく落ち着きを持ちなさい。」

氷川「余計なお世話です。しかしソフィさんのクウガの力もあれば未確認相手でも敵じゃないですよ。」

G3を改良し、性能をかなり引き上げた。

クウガもライジングの力を早期に手に入れ力を増した。

この二つの力があれば氷川の言う通り未確認ことグロンギを倒しきることができるかもしれない。

小沢「調子に乗らないの氷川くん。」

ソフィ「真、悠斗から離れて私抱きつけない。」

この世界はいつたい俺に何をみせてくれるのかな？
俺は皆を見ながらそう思っていた。

グロンギ side

そこには複数のグロンギが集まっていた。

グ1「なぜだ人間があれほどの力を！！」

グ2「このままでは究極の闇の復活が。」

グロンギ達が苦悩している時……その場所に……。

現れた。

異質だった。

紅い闇を纏った一人の女性が現れた。

グロング達が攻撃しようとするが女性が手をかざしたらだけでグロング達は忽然と消え去ってしまった。

『さあ、闇よ、究極の闇よ、本来復活することが出来ない闇よ。私が蘇らせてあげる。異世界の力で……………。』

その女性の言葉と共にソフィが眠っていた棺と酷似した棺から闇が溢れた。

「ウォーー!!」

闇が吠える。

そしてこの世界は闇に包まれる。

悠斗side

今はGトレーラー内にて宴会中である。なぜかと言うともう一週間もグロングが現れておらずちょっとした無礼講、羽休みである。

全員でいろんな料理をつつきあっている。お酒は飲んでいない。何時何があるかわからないから。

そんな皆で楽しんでいる時……。

ウーン！ウーン！

警報「九郎ヶ丘遺跡付近に招待不明の黒い霧発生、それと同時に大量の未確認が県内に出現。繰り返す……………」。

御室「どういうことですか!？」

小沢「わからないわ。とにかくGトレーラー発進よ!」

氷川「了解!」

ソフィ「うん。」

悠斗「……………。まさかこの感覚は。」

ソフィ「悠斗?」

悠斗「いや、なんでもない。」

ソフィ「そう?」

この感覚はまるで、いやあり得ないはずだがあれがここにいるなんてだがグレイセスの世界のソフィもいた。もしかしたらいや、考えるな。そうここにラムダがいるなんて……………。

Gトレーラー移動中……………

小沢「なによこれ!？」

御室「冗談きついですよ。」

氷川「!？」

ソフィ「凄いたくさんいる。」

悠斗「総数100体いや、それ以上か!？」

全員驚愕せざるを得ない。見渡す限りグロンギ。

ソフィ「っ!？悠斗上に何かいる!!！」

ソフィの言葉に上を向くとそこには紅い闇を纏った何か、いや俺はあれを知っている。

そうあれはラムダ。 그레이セスの世界のラムダ。
だがあれはグロンギ。

ン・ラムダ・ゼバ

究極の闇改変（後書き）

クウガの世界が終わったら次はどの世界に行かせよう。

駄文です。

世界の融合、ソフィの正体（前書き）

会話文だけでは駄目なのだろうか。

世界の融合、ソフィの正体

悠斗 side

闇が佇んでいた。紅い闇がそう俺はあれを知っている。

ン・ラムダ・ゼバ

存在することはない物。

だがこの世界ではあり得るこの二つの世界が融合した世界では。

ン・ダグバ・ゼバ

ラムダ

二つの闇交わりし存在。

悠斗「そうかこの世界はクウガの世界であると共にグレイセスの世界でもあると言うことか。だけどあの紅い闇は何なんだ何処かで見ることが……………」

ソフィ「あれだ……………」

悠斗「ソフィ？」

俺のつぶやきを気にせずソフィが言葉を紡ぐ。

ソフィ「思い出した。私あいつら倒す為に作られたんだ。」

氷川「作られた？」

小沢「どうしたことよ。」

ソフィ「私古代のリント、人間によって作られた人型戦闘兵器、プロトス・ワン。クウガの器としてグロンギを倒す為に作られた存在なの。」

悠斗「……………」

氷川「プロトス・ワン。」

小沢「闘うためのだけの戦士。」

ソフィ「うん。私は皆とは違うの、普通じゃないみたい。」
顔を伏せるソフィ

悠斗「だからなんだ。ソフィはソフィだろう。」

ソフィ「私は私？どうして、悠斗は私が怖くないの。私は普通じゃないのに。」

悠斗「変わらない。ソフィがなんであろうとな。」

俺はソフィを抱きしめる。

ソフィ「悠斗……………。ありがとう。私……………悠斗を悠斗の笑顔を守る……」

そっいつてGトレーラーから外に出るソフィ。

小沢「ふふっ。氷川君も負けてられないわね。」

氷川「麻生さん、いえ悠斗さん！！私も守ります貴方を！！」

両手を握ってくる氷川。顔が近い！！

悠斗「あ、ありがとう。」

御室「氷川さん、G3準備完了しています。」

氷川真「わかりました。行ってきます悠斗さん！！」

悠斗「行つてらっしゃい真。」

真「はい！」

ソフィ「変身！！グロンギ貴方達を倒す。」ソフィの身体が赤かい装甲が包んで行く。

真「ソフィさん！」

ソフィ「真行くよ、超変身！！！」

ソフィがライジングタイタンに変わる。

真がGスタンソード（スタンガンブレード状にしたもの）を二本取り出してその内の一本をソフィに渡す。

ソフィはそれをライジングタイタンソードに変える。

二人「うおー!!」

そしてグロンギの大群に斬りかかって行く二人。

Gトレーラー内部

御室「とんでもない数ですよこれは。」

小沢「そんなことは言われなくても分かるわよ。でもやっぱり数だけね、圧倒的じゃないあの二人。」

二人の戦いをモニター越しに見ながら話す二人。

悠斗「妙だな。」

俺は今ひとつ附に落ちないでいた。

小沢「何がよ？」

悠斗「あの上にいるラスボス的な奴なにもしてこない。」

そう、ン・ラムダ・ゼバが動かない。

ただ空中に佇んでいるだけなのである。

小沢「確かに妙ね。氷川君達に気をつけるように言っておきましょう。」

その時だった。

ラムダ「グウウウオオオー!!」

ン・ラムダ・ゼバが紅い闇に包まれる。そして咆哮をあげる。

ン・ラムダ・ゼバからの咆哮と共にその身体から衝撃波がソフィと真を襲う。

小沢「くっ!?!」

御室「うわぁ!?!」

悠斗「ここまで衝撃が来るとは。」

Gトレイラーも衝撃波の影響でかなり揺れていた。

ラムダ「私は目覚めるはずなかった。だが紅き闇によって我は目覚めた。」

小沢「人間の言葉を喋った!?!」

悠斗「紅い闇?」

ラムダ「リントよ我を倒せさもなくばお前達に未来はない。ぐっ!?!
?ウアアオオオー!!」

その叫びと共にグロングがさらに増えた。

小沢「いくらなんでもこの数は。」

御室「まずいんじゃないですか!?!」

悠斗「G3Xを使う!」

俺は最後の手段として小沢さんに告げる。

小沢「駄目よ、暴走するわ!」

G3X、性能的にはG3を圧倒的に超える。だが一つ問題がある。AIが完璧過ぎて装着者が耐えきれないということ。G3ユニットが一時期謹慎になっていたのはその暴走のせいである。

悠斗「大丈夫だ。俺を信じろ!」

小沢「たくつ、仕方ないわね。御室君手伝って。」

御室「わかりました。」

ソフィ&真side

私達二人は増えた敵に苦戦していた。

真「なんていう数だ!？」

ソフィ「諦めたら駄目!！」

真「わかってます!!」

二人は確かに強い、だが数の暴力の前に徐々に押されて行く。
ソフィ「くっ!？」

その時だった。

悠斗「二人共そこから離れろ!!」

その掛け声と共に左右に別れ避ける二人。そこにガトリングガンが打ち込まれる。そして大量のグロウギを撃ち倒していく。

そしてそこに立っていたのはG3Xを装着した悠斗だった。

世界の融合、ソフィの正体（後書き）

駄文です。

後1話位でクウガの世界は終わります。

最後の戦い 優しき戦士（前書き）

長らくお待ちせしました。誰も待っていないかもしれませんが。

最後の戦い 優しき戦士

悠斗 side

今俺はG3Xを装着してソフィ達の援護に駆けつけていた。

悠斗「大丈夫か二人共？」

ソフィ「悠斗なの？」

真「それはG3X！？悠斗さん大丈夫なんですか？」

悠斗「ああ。俺は全てに置いて頂点に立つ男の娘、もとい男だからな。それよりも今は戦いに集中しろ。」

そう言う俺はGXガトリングガンを構える。

真「了解！」

ソフィ「うん。超変身！」

真もライフルを構える。

ソフィはライジングペガサスフォームに変わり、ボウガンを構える。

悠斗「今だ撃て！！」

三人が同時にグロンギへと一斉に攻撃する。

真「やったか!？」

ソフィ「まだラムダが!？」

ラムダ以外のグロンギは今ので全滅した。だが……………。

ラムダ「ぐうおおおおおー!!」

ラムダの両手から闇が生まれ三人襲いかかる。

悠斗「くっ!？まずい!？」

咄嗟に二人の前に出て攻撃を受け止める。G3Xの装甲から火花が散る。

攻撃がおさまり膝を着く。そこに二人が駆け寄る。

ソフィ「悠斗大丈夫!？」

真「悠斗さん大丈夫なんですか!？」

悠斗「ああ。俺はなんとかだがG3Xが。」

今の攻撃でG3Xのダメージが限界値を超えていた。

小沢さんと御室さんからG3Xに内蔵されている通信機から連絡が来る。

御室「ダメージが八十%越えました。」

小沢「これ以上戦闘は無理よ!下がって麻生君。」

悠斗「くっ、ここまでか!？」

まともに闘えない俺がいても足手纏いか。

悠斗「ソフィ、真すまないが後は頼む。」

ソフィ「うん。後は私達に任せて!」

真「悠斗さん見守っていてください。」

悠斗「頼んだぞ。」

そう言つと俺はガトリングガンを真に託し下がる。

それと同時にン・ラムダ・ゼバに向かって走り出す二人。

それを見守る悠斗。

二人はラムダと対峙する。だが……………。

ラムダ「ぐおおおおお!」

二人の攻撃を物ともせず二人寄せ付けないラムダ。

真「ぐわあ!」

Gトレーラー付近まで吹き跳ばされる真。

ソフィ「真!? 超変身!」

ライジングマイティフォームへと変わるソフィ。

だがその攻撃ですらラムダは受けつけない。

悠斗「まずい！？何かてがあれば。」

なんとかソフィを助けようとする悠斗。だがライダーにすらなれない今はどうしようもない。
だがそんなとき……………。

二世「悠斗見ているだけでいいのか？」

悠斗「二世！？今まで何処に？」

キバット・バット二世が現れた。

二世「この世界の闇を探していた。そんなことより助っ人を連れて来たぞ。」

悠斗「助っ人？……………まさか。」

由利亜「悠斗ー！！貴方の愛しい由利亜が助けに来たよー！！」

由利亜がマシンキバーに乗って現れた。

悠斗「予想通りと言うかなんと言うか。」

ソフィ「っ！？」

由利亜が着いたと同時にソフィがこちらに、ラムダの攻撃により変身解除されて吹き跳ばされてきち。

すかさずキャッチしてソフィをお姫様抱っこする悠斗。

悠斗「大丈夫かソフィ？」

ソフィ「うん。ありがとう悠斗。」

そして地面にソフィを立たせる。

由利亜「悠斗この娘は？」

悠斗「ソフィだ。よろしくしてやってくれ。」

由利亜「うん。よろしくねソフィ。」

満面の笑顔で話しかける由利亜だが……………。

ソフィ「……………」。

なぜか無視するソフィ。

由利亜「あれ、無視されちゃったよ悠斗。」

そう言いながら悠斗に抱きつこうとする由利亜。

だがソフィが悠斗と由利亜の間に立ち手を広げ猫の様に由利亜を威嚇する。

ソフィ「むー!!」

由利亜「ま、負けないぞ。ふしゃー!!」

悠斗「なるほど。本能的に合わないのか。って遊んでいる場合じゃ

ない行くぞ二人とも。」

ソフィ「貴方との決着はまた後で。」

由利亜「おっぱいは私の方が大きいもん。」

悠斗「馬鹿な事言っていないで行くぞ。二世！」

二世「ああ。ラムダよ貴様の闇をみせて見る。がぶり！」

悠斗の右手に二世が噛みつき魔皇力を注入する。

由利亜「私も行くよ！！キバット！！」

三世「よっしゃ、キバって行くぜ。かぶっ！！」

由利亜は左手を掲げるとそこにキバット・バット二世が飛来する。そしてキバット・バット三世に右手を噛ませる。すると三世から由利亜に魔皇力がそそぎこまれる。

ソフィ「わたしも！」

ソフィが腰に手をかざすとアマダムをひめたアークル、クウガのベルトが出現する。

三人「変身！！」

三人が同時にそう言うとその姿が変わっていた。

由利亜が変身した仮面ライダーキバ。

ソフィが変身した仮面ライダークウガ。

そして悠斗が変身した仮面ライダーダークキバ。

三人のライダーが並び立つ。

ソフィ「悠斗と一緒に絶対にはけない！」

ソフィの覚悟に応え世界は周りだす。

悠斗の手に黒と金のフェッスルが握られる。

悠斗「これがこの世界の旅の答えか。」

そのまま二世に吹かせる。

二世「アメイジング！！」

そのフェッスルの音色と共にクウガの装甲が赤から黒に変わる。

クウガアメイジングマイティフォーム。このクウガの世界は応えてくれたようだ。

由利亜「よし。私も負けてられない。」

由利亜は紫色のフェッスルを取り出すと三世に吹かせる。

三世「ドツガハンマー!!」

紫色のキバ、ドツガフォーム。

悠斗「二人とも一気に行くぞ。」

由利亜「OK!」

ソフィ「うん。」

俺は二世に黒いフェッスルを吹かせる。

二世「ウェイクアップ1!!」

由利亜「こっちも行くよ!!」

由利亜はドツガハンマーを三世に噛ませる。

三世「ドツガバイト!!」

ソフィ「ラムダこれでお別れ。」

ソフィの右足に雷のエネルギーが凄い勢いでほとばしる。

キバドツガフォームのドツガ・サンダースラップが空中のラムダを叩き落とす。

由利亜「二人ともいま!!」

クウガのアメイジングマイティキックとダークキバのダークネスヘルクラッシュが落下してきたラムダにぶつけられる。

悠・ソ「はあー!!」

ラムダ「ぐわおおー!!」

爆散するラムダ

そしてクウガの世界の脅威は去った。

悠斗「本当に良いのか？」

ソフィ「うん。私も悠斗と一緒に旅をしたい。」

悠斗「……………」

ソフィ「駄目？」

三世「良いんじゃないか。旅は道連れって言うし。」

悠斗「仕方がないか。よし良いだろう。一緒に旅をしようソフィ。」

ソフィ「うん。よろしくね悠斗。二世に三世も。」

三世「ああ、よろしくな。」

二世「せいぜいがんばれ。」

由利亜「私はむし!?!」

由利亜は手を上げてアピールするが完全に無視されている。

悠斗「ずいぶん嫌われたな由利亜」

由利亜「うつつ、悠斗慰めてー。」

由利亜が飛びかかってくるがソフィがすかさず殴り飛ばす。

由利亜「へぶっ!?!」

壁に叩きつけられる由利亜、痛そう。

「悠斗」で、では次の世界に行くのでしょうか。ダイヤルを回してっと。

ガタン

ダイヤルを回すと軽い揺れを感じた。

ソフィ「ついたの?」

悠斗「みたいだな。外に出てみよう。」

外に出ると目の前に学校が見える。

悠斗「スマートブレインハイスクール。なるほどファイズの世界か。」

赤き閃光仮面ライダーファイズ

悠斗はこの世界で何を変えるのか。

真side

真「駄目でした。やっぱり悠斗さんの事誰も覚えていませんでした。」

小沢「いったいどういうことなのかしら？」

御室「まるで最初からいなかったみたいですね。」

真「もしかしたら私達の知らない何か大きな力が働いてなんてことは？」

小沢「大きな力ねえ。」

小沢達三人が話しているその時……………。

『未確認出現付近の部隊は直ちに現場に急行して下さい。』

警報が鳴る。

小沢「氷川君発進よ！」

氷川「了解しました。」

この世界は回り出す。次のものがたりへと。

最後の戦い 優しき戦士（後書き）

次回ぶらり世界旅 ライダー世界編

「これって運命ですよね。」

「これは帝王のベルト、俺の力だ。」

「貴様がファイズか!？」

「ちょっと違うな。」

「私は一人なんです。」

「俺も昔そうだった。」

「王の判決を言い渡す死だ。」

「なら俺は帝王の判決を言い渡すなんてな。変身!」

「加速しろ!!」

旅人の旅により世界は回りだす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2498t/>

ぶらり世界旅 ライダー世界編

2011年10月9日02時53分発行